

## スライドによる岩手山の景観分析 (2)

——季節・前景などの相違による印象評価の特徴——

加 藤 孝 義

われわれは先に岩手山の景観をカラーズライドに作成し、岩手山の景観の中の山・空・緑・湖水などの面積（物理量と呼ぶ）の割合が、岩手山の印象にどのような影響を与えているかを検討した（加藤，1987）。その結果，まず岩手山の印象を問われる場合には，人は“雄大である”，“美しい”，“冠雪している”といった「相貌性因子」に関わる反応を圧倒的に多く示すことが知られた。これは岩手山を景観として眺めるときには，視空間の中に岩手山の占める割合が大きいと，人はそれに“厳しい”山という印象を持つことを示唆している。しかし山の視覚情報量が少ない場合には，前景の緑の量や湖水の占める量によって，“明るい”という「情緒性因子」，“静かな”という「快適性因子」が，それぞれ作用することが明らかとなった（表1）。そのほかにも，一部のスライドから「重厚性」，「開放性」の因子が働く場合のあることも判明した。

本論では，上に指摘した物理量を独立変数として検討したほかに，岩手山の四季の景観，夕暮時の景観などが，どのような印象をもたれているかを検討課題としたので，その結果を報告する。

表1 岩手山の景観に寄与する主要3因子とその評定語（加藤，1987）

評定語	因子	快 適 性	相 貌 性	情 緒 性
尺 度 番 号		2, 4	11, 14	3, 15

### 〔方法〕

#### 1) 景観カラーズライド

放送局や盛岡市内在住のアマチュア写真家が撮影したカラー写真の中から，ほぼ同一場所でも撮影した岩手山の四季の写真，夕暮時の特殊な写真など，合計9枚の写真を選択し，カラーズライドにした（写真1～9）。

#### 2) 手続き

岩手山の景観スライド評価のための評定語は，前回にも採用した表2に示す15対の形容

表2 評定尺度語

尺度番号	尺 度	尺度番号	尺 度
1	面 白 い・つまらない	9	調 和 し た・ばらばらな
2	静 か な・うるさい	10	重 厚 な・軽 薄 な
3	開 け た・閉ざされた	11	鋭 い・鈍 い
4	落 ち つ い た・落ちつかない	12	存 在 感 ある・存在感ない
5	自 然 的 な・人工的な	13	聖 な る・俗 の
6	雄 大 な・こじんまりした	14	敵 し い・穏 や かな い
7	美 し い・醜 い	15	明 る い・暗 い
8	母 性 的 な・父 性 的 な		

詞群である。これらの評定語は、5段階尺度を付して小冊子にされ、9枚の景観スライドの印象評価のために使用された。各スライドは講義室で学生集団に提示され、提示時間は約2分であった。この間に、各被験者は手元の小冊子によって、1枚のスライドについての印象を15対の形容詞群に関し5段階評定によって評価するように求められた。この手続きを9枚の景観スライドについて反復する。被験者は95名の男女大学生である。

### 〔結果〕

15対の形容詞群についてSD法によって得られた被験者全体の印象評価の平均値と、各スライドの平均値を比較した結果を、図1の1から9までに示す。

写真1（春）は、岩手山全体の平均的印象よりも穏やかで明るいと判断されている。写真2（夏）は、静かな、落ち着いた・母性的なといった快適性の尺度では、全体の印象とはほぼ類似の印象を持たれているが、その他の点ではグラフ全体が右寄りに評価されており、各尺度に対して否定的見方をされているので、あまりよい印象はもたれていないことを示している。写真3（秋）は、開けた・母性的なといった開放性尺度では、全体の印象と同様であるが、この写真はとくにうるさく、落ち着かず、人工的であると評価されている。写真4（冬）は、開放性尺度は全体の印象と同じような印象をもたれているが、15対の形容詞群に対して左寄りのグラフを示しているので、それらの尺度でより肯定的な良い印象をもたれていることが分かる。

他方、四季以外の景観である写真5から9についてみると、写真5（松園団地より見たもの）、写真7（前景に草地のあるもの）および写真8（夕暮れ時のもの）は、岩手山の全体の印象とはほぼ同じように評価されており、写真6（前景に湖水のあるもの）も形容詞の評定尺度番号1から9までが、全体像よりもやや左寄りの評価をされている違いがある以外は、やはり全体像と類似の傾向を示している。この中で、写真9（裏岩手）は、“父性的”で“鋭く”また“敵しい”という相貌性尺度で高い評価を得ているのが特徴的である。

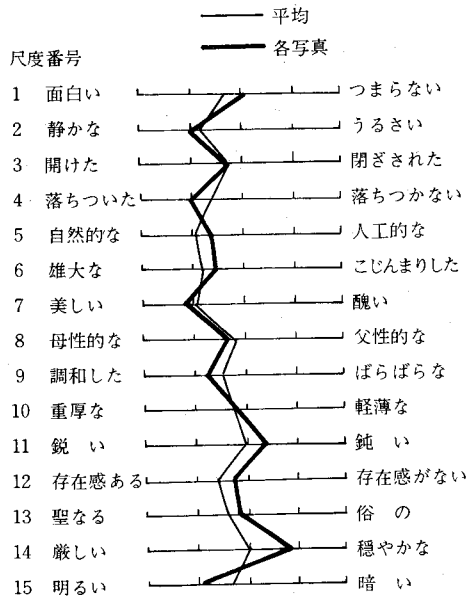


図 1-1 平均値 (春)

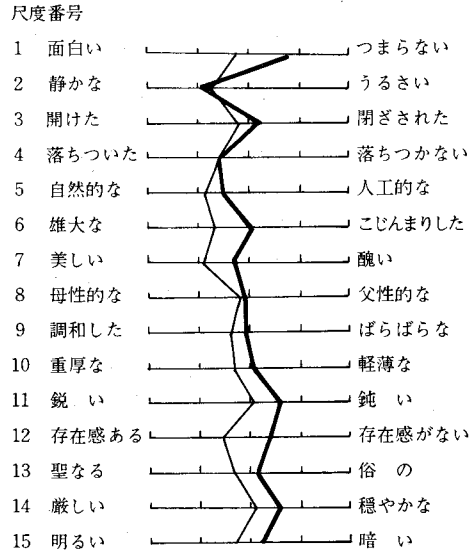


図 1-2 平均値 (夏)

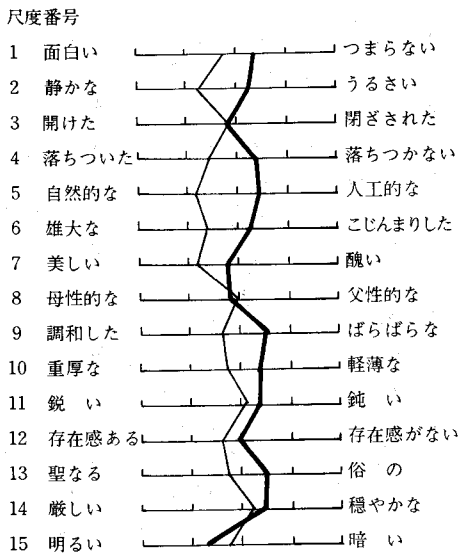


図 1-3 平均値 (秋)

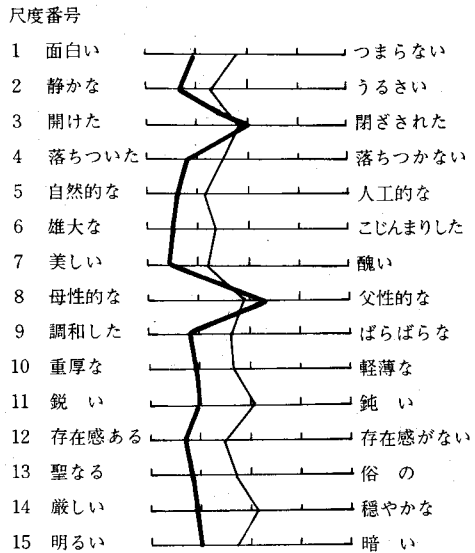


図 1-4 平均値 (冬)

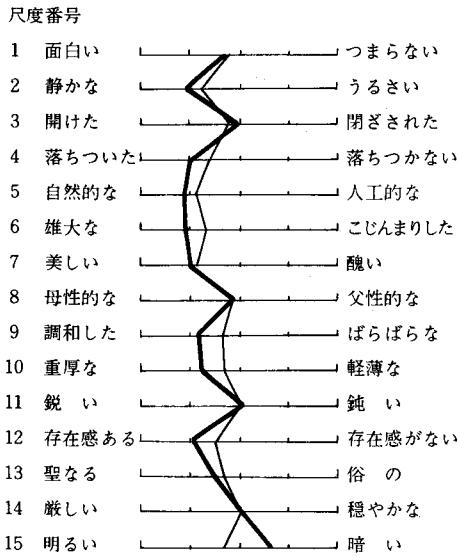


図 1-5 平均値 (松園から見た岩手山)

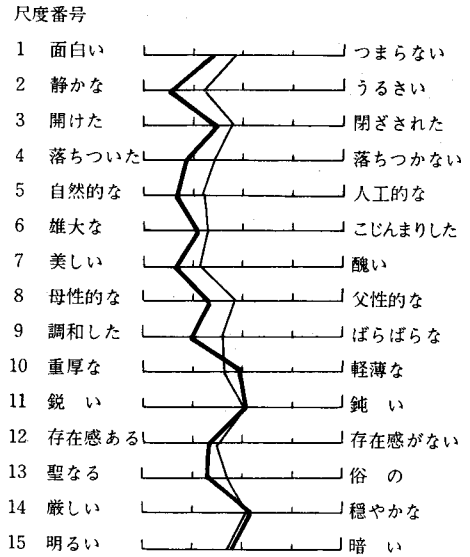


図 1-6 平均値 (湖水上に見える岩手山)

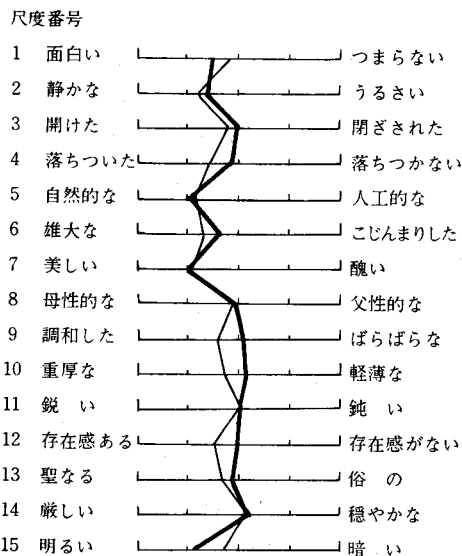


図 1-7 平均値 (草地の前景)

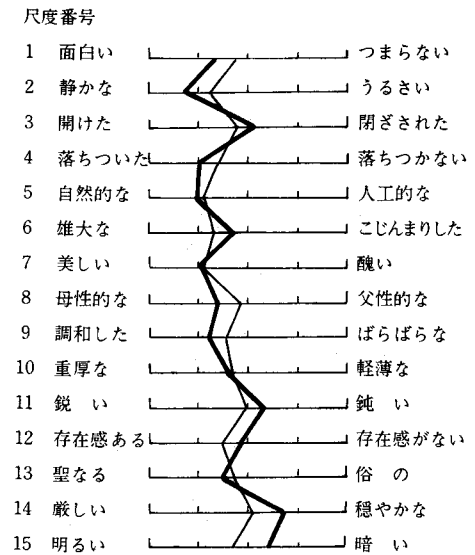


図 1-8 平均値 (夕暮れ時)

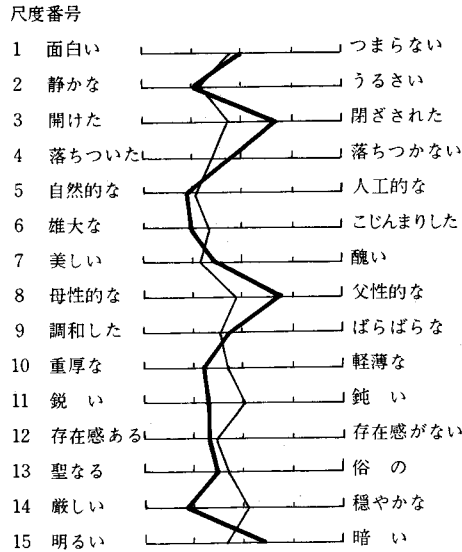


図 1-9 平均値 (裏岩手)

表3 平均値からみた各写真の特徴

写真No.		1	2	3	4	5	6	7	8	9
全体と 比較	Ⅰ 快適性			2. うるさい 4. 落ちつかないなど	2. 静かな 9. 調和したなど		2. 静かな 4. 落ちついたなど			
	Ⅱ 相貌性	14. 穏やかな	14. 穏やかな 11. 鈍いなど	14. 厳しい 11. 鋭いなど	14. 厳しい 11. 鋭いなど					8. 父性的な 11. 鋭い 14. 厳しい
	Ⅲ 情緒性	15. 明るい	15. 暗い 1. つまらないなど	15. 明るい 1. つまらないなど	15. 明るい 1. 面白いなど	15. 暗い	3. 開けた			3. 閉ざされた
総合評価 (7 美しい)		—	↓	↓	↑	—	↑	—	—	—

総合評価 一：全体とほぼ同じ    ↑：全体より美しいと評価    ↓：全体より醜いと評価

これらの結果を表3にまとめて示す。表からみると、四季の中で夏の岩手山の写真は、相貌性および情緒性の面から、また秋の写真は快適性および相貌性の面から、それぞれあまり良いという印象をもたれていないことを示唆しているとみることができる。写真の印

表4 各写真の印象についての因子構成表

写真No.		1	2	3	4	5	6	7	8	9
因子名										
I	快適性因子	○		○	○〈3位〉	○〈II〉	○〈2位〉	○〈2位〉	○〈3位〉	○〈III〉
II	相貌性因子	○〈3位〉	○〈2位〉	○	○〈III〉 (3位)	○〈III〉 (2位)	○〈III〉	○	○〈III〉	○〈I〉
III	情緒性因子	○〈2位〉	○	○〈3位〉	○〈II〉 (2位)	○〈I〉 (5位)	○〈II〉 (2位)	○		○〈II〉
その他	重厚性因子		○〈I〉 (3位)						○〈II〉 (3位)	
	開放性因子									

○: その因子によって構成されていることを示す。

< >: 抽出された次元。

( 位 ): 代表尺度の次元の中での順位。

○以外の表示のないものは、その因子番号の次元で1位であることを示す。

象としては、むしろ冬の写真の方が総合評価としては美しいという点で高い評価を得ているのが知られる。

次に、個々の写真について因子分析を行ってみた結果を表4に示す。結果の表示方法は、まず各因子尺度の代表尺度を設定し、その尺度を中心に因子を構成しているものには丸印によって表中に示した。ここでも、個別的写真から抽出された重厚性の因子には、尺度番号10の「重厚な—軽薄な」の尺度を、また開放性の因子には尺度番号3の「開けた—閉ざされた」の尺度をそれぞれ代表尺度として設定した。

表4からみると、重厚性の因子は夏の岩手山のようにぼんやり見えたり、夕暮で岩手山のシルエットしか見えないような写真のように、山自体からの情報があまりないときに大きく作用すると予想できる。また冬の雪景色の写真や、山の前景となる湖水・草原などの山以外の印象が強い場合には、相貌性の因子よりも情緒性の因子が強く作用するといえる。さらに、写真9のように裏岩手の山そのものの形態が特徴的である場合には、相貌性因子が大きい役割を果たすことが知られる。

表4の各因子の相互関係をより見易くするために、バリマックス回転後の因子負荷量に因子の寄与率を乗じたものの全体を1として、各主要因子のそれに対する比によって表示してみたのが、図2の1から10までに示したものである。これらの図によって、三つの主要因子間の相対的比重を知ることができる。

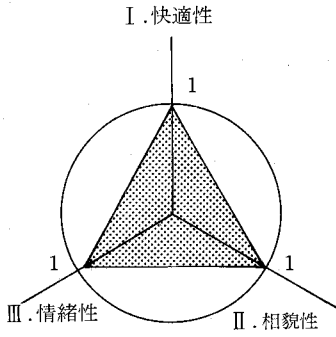


図 2-1 (全体)

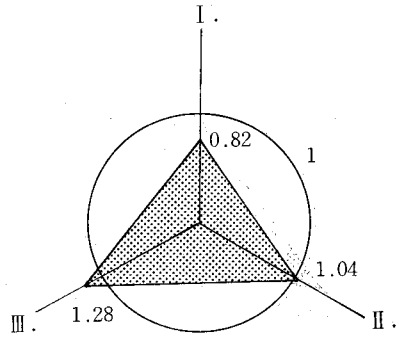


図 2-2 (写真1)

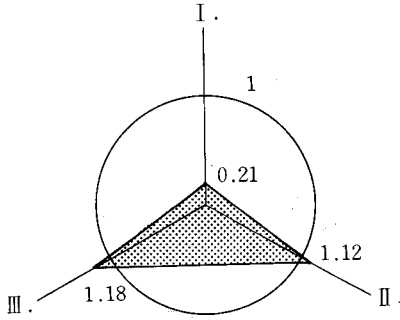


図 2-3 (写真2)

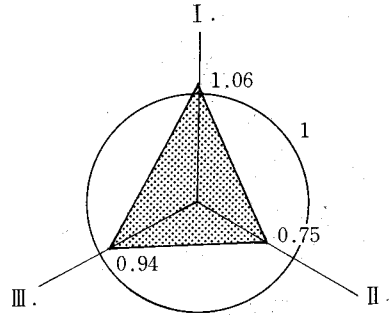


図 2-4 (写真3)

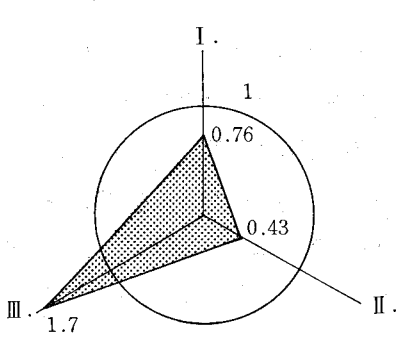


図 2-5 (写真4)

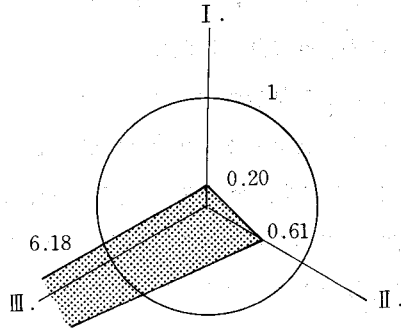


図 2-6 (写真5)

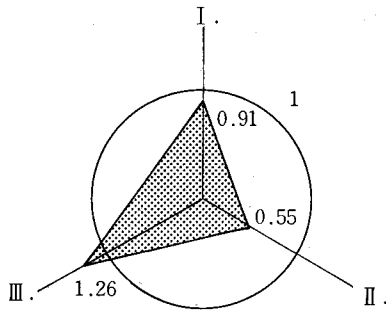


図 2-7 (写真6)

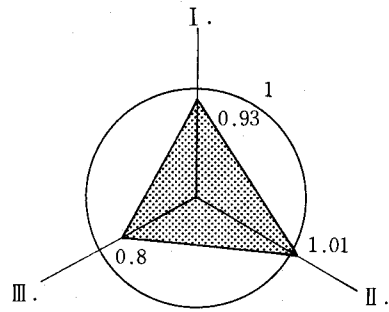


図 2-8 (写真7)

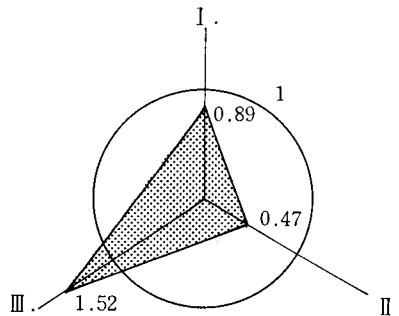


図 2-9 (写真8)

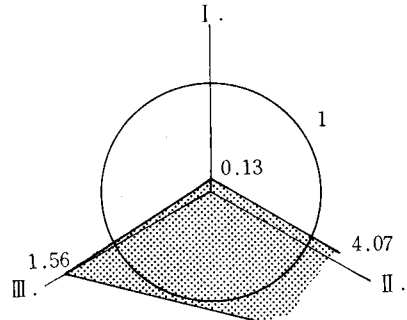


図2-10 (写真9)

## 〔考察〕

前回の報告と本報告を併せて考察すれば、スライドによって岩手山の景観についての印象を評価するように求められた場合には、視空間のなかで山の占める面積が大きいと、人は山の相貌性に強い印象をもつが、それが減少したり、前景の占める割合が増加したりすれば、むしろ景観に明るさや静けさを感じて、山の相貌性の印象は薄らぐ傾向が認められるということである。また本報告のように季節感のある写真を景観評価の材料にするには、ひとつの限界がある。一般にわれわれは、日常的には岩手山を自分の肉眼でその景観を鑑賞しているのであるが、写真になるととくに春の季節には、霞がかかっていて山の容貌が肉眼のようにその輪郭が明瞭でない恨みがあるので、写真ではその分だけ山の印象が薄れるのである。さらに岩手山のように高山である場合には、冬季以外でも冠雪があって、季節感はむしろ前景によって判断されるような面も存在し、それがまた山の景観の評価にも影響を与えることがあると思われる。これらの難点を避けるためには、季節折々に特定の場所から肉眼で多くの観察者が同時に、景観の印象を評価するのが理想的であるといえる。



岩手山の景観は、ここで報告した以外にも例えば国道4号線沿いに見える景観について、その印象の順位づけを行ってみるとか、この研究で見出された五つの因子のそれぞれに関して、一対比較法によってそれぞれの因子が最も強くはたらいっているような景観はどんなものであるか、といったような観点からの研究も可能であると思われる。

付記：本論の資料は、坂井蒔美、『景観に関する一研究』（昭和61年度人文社会科学部卒業論文）に依っている。

また本論で使用した岩手山の景観写真は、山崎 等氏のご厚意によるところが大きい。とくにここに記して感謝申し上げる次第である。

## 文 献

1. 安藤 昭, 1984, 盛岡城跡からの岩手山の眺望の確保に関する景観工学的研究, 土木計画学研究・論文集 Vol. 1, 20.
2. 畔柳昭雄 (他), 1977, 海岸景観の意識量を基にした研究, 日本建築学会学術講演梗概集<計画系>, 昭53, 595-596.
3. 樋口忠彦, 1984, 『景観の構造』, 技報堂出版.
4. 船越徹 (他), 1977, 街路空間の研究 (その4), 街路空間構成要素の空間意識との相関について, 日本建築学会学術講演梗概集<計画系>, 昭53, 583-584.
5. 信沢紀夫 (他), 1977, 連想語法による海岸景観把握手法の研究, 日本建築学会学術講演梗概集, 昭53, 593-594.
6. 菅田重男, 1984, 街路空間における圧迫感についての一考察, 筑波大学環境科学研究科, 昭59年度修士論文 (未刊行).
7. 加藤孝義, 1986, 『空間のエコロジー』新曜社.
8. 加藤孝義, 1987, スライドによる岩手山の景観分析——SD 法による評価と“物理量”の対応関係——アルテス・リベラレス (岩手大学人文社会科学部紀要), 41, 113-121.
9. Terry, C. D. & Vining, J. 1983, Methodological Issues in the Assessment of Landscape Quality, in 『Behavior and Natural Environment』 Vol. 6, 39-82. Plenum Press, N. Y. & London.

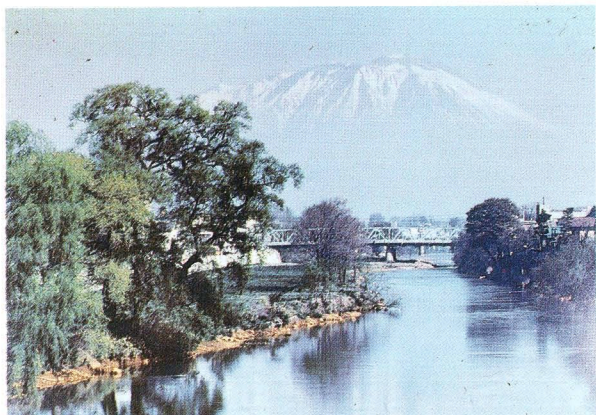


写真1 [春]

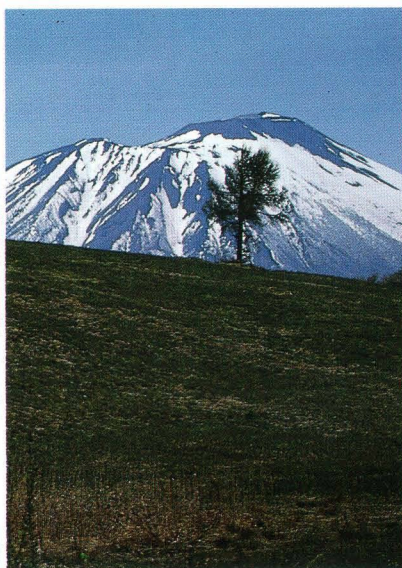


写真7 [草地の前景]

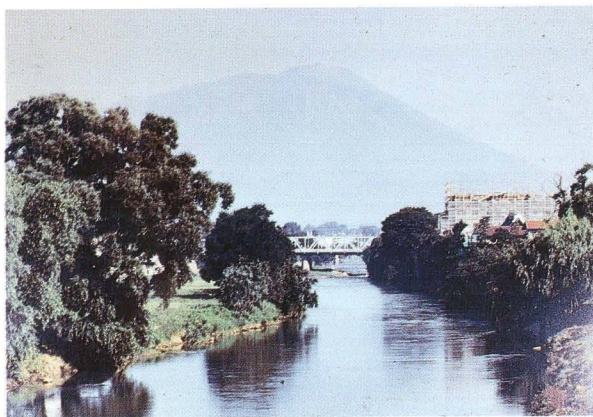


写真2 [夏]

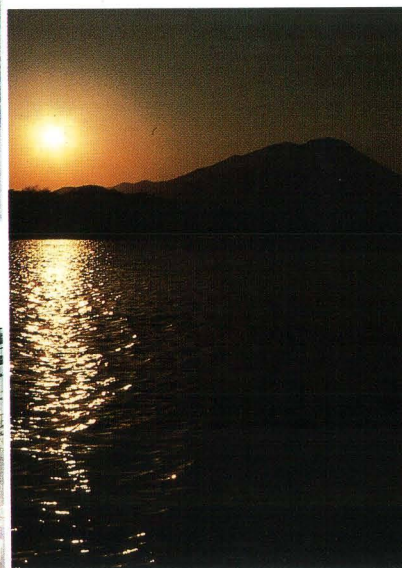


写真8 [夕暮れ時]

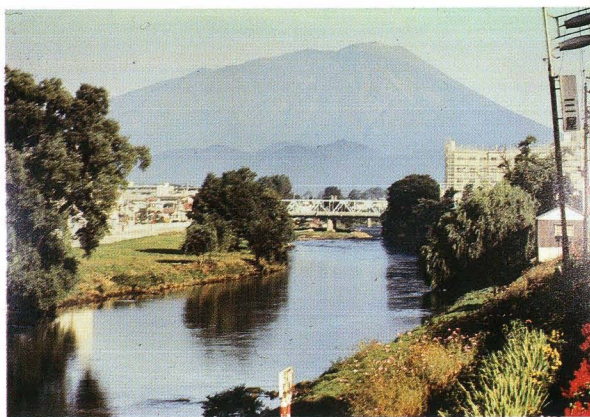


写真3 [秋]

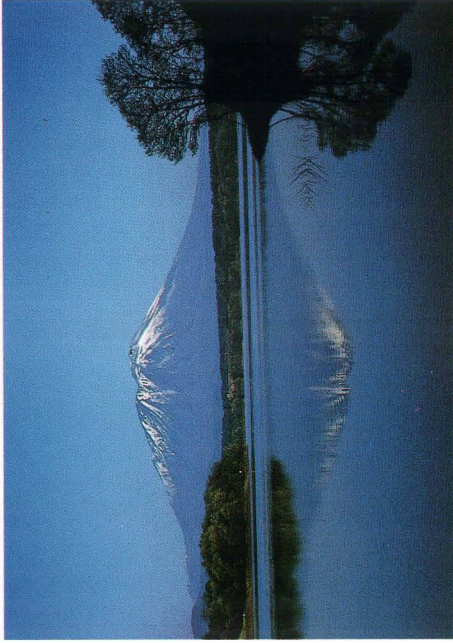


写真6 (湖水上に見える岩手山)

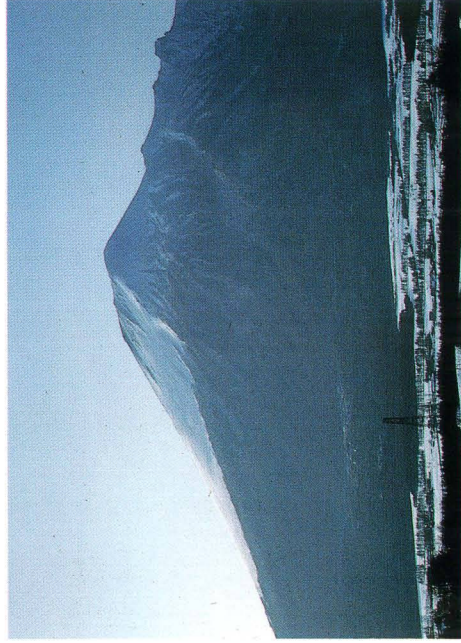


写真9 (裏岩手)



写真4 (冬)

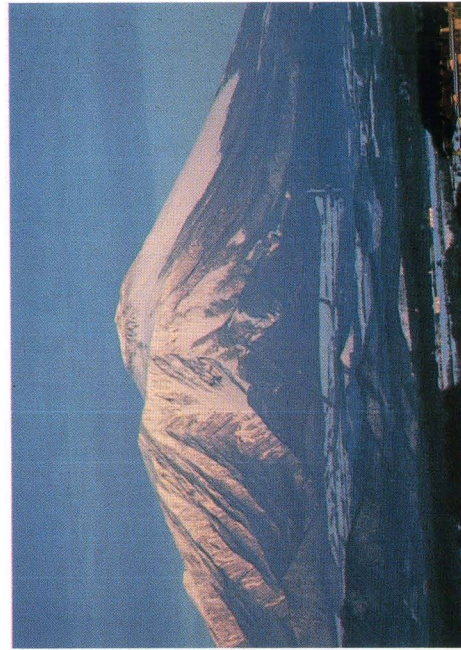


写真5 (松園から見た岩手山)